

別図第四号の八の八の二 搬送波の変調波スペクトルの許容範囲(第37条の27の11の3第2号関係)

搬送波の周波数からの差	平均電力Pからの減衰量	規定の種類
$\pm (3 \times n / 14 + 0.25 / 126) \text{MHz}$	$10 \log (10 / (6000 / 14 \times n)) \text{dB} / 10 \text{kHz}$	上限
$\pm (3 \times n / 14 + 0.25 / 126 + 1 / 14) \text{MHz}$	$-20 + 10 \log (10 / (6000 / 14 \times n)) \text{dB} / 10 \text{kHz}$	上限
$\pm (3 \times n / 14 + 0.25 / 126 + 3 / 14) \text{MHz}$	$-27 + 10 \log (10 / (6000 / 14 \times n)) \text{dB} / 10 \text{kHz}$	上限
$\pm (3 \times n / 14 + 0.25 / 126 + 22 / 14) \text{MHz}$	$-50 + 10 \log (10 / (6000 / 14 \times n)) \text{dB} / 10 \text{kHz}^*$	上限

* 空中線電力が $0.025 \times n / 13 \text{W}$ を超え $2.5 \times n / 13 \text{W}$ 以下の無線設備にあつては $-(73.4 + 10 \log P) \text{dB} / 10 \text{kHz}$ 、空中線電力が $0.025 \times n / 13 \text{W}$ 以下の無線設備にあつては $-(73.4 + 10 \log (0.025 \times n / 13)) \text{dB} / 10 \text{kHz}$ とする。

注1 複数波同時増幅を行う無線設備の隣接チャンネル間については、上表にかかわらず、平均電力Pからの減衰量 $10 \log (10 / (6000 / 14 \times n)) \text{dB} / 10 \text{kHz}$ を上限とすることができる。

2 搬送波の変調波スペクトルの許容値の規定範囲は、搬送波の周波数を中心として $\pm (2.5 \times (6 / 14 \times n + 38.48 / 1,000)) \text{MHz}$ とする。

3 nは、デジタル放送の標準方式第28条第2項のOFDMフレームに含まれるOFDMセグメントの数とする。

4 上表にかかわらず、 202.5MHz の周波数における空中線電力Pの上限は、以下に示すとおりとする。

空中線電力	202.5MHzにおける空中線電力の上限
$P > 1,000 / 6 \text{W} / \text{MHz}$	$-62.4 \text{dBW} / 10 \text{kHz}$
$1,000 / 6 \geq P > 100 / 6 \text{W} / \text{MHz}$	$10 \log (P) - 20 - 65 \text{dBW} / 10 \text{kHz}$
$100 / 6 \geq P \text{W} / \text{MHz}$	$-72.4 \text{dBW} / 10 \text{kHz}$